



サンプル版



サンプルをダウンロード頂き、ありがとうございます。

当作品は PDF での提供となっております。

事前にこちらのサンプルが正しく表示できるか

ご確認をお願いします。

◆PDF リーダーについて

PDF をご覧になる際は、OS やブラウザ組込みの PDF リーダーではなく、Adobe 社純正の単体 **Acrobat Reader** をお使いいただく事をお勧めします。純正リーダー以外をご利用の場合、表示品質が低下したり、見開き表示の左右が逆になってしまう場合がございます。

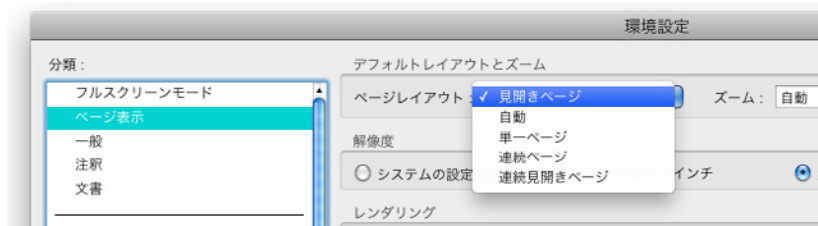
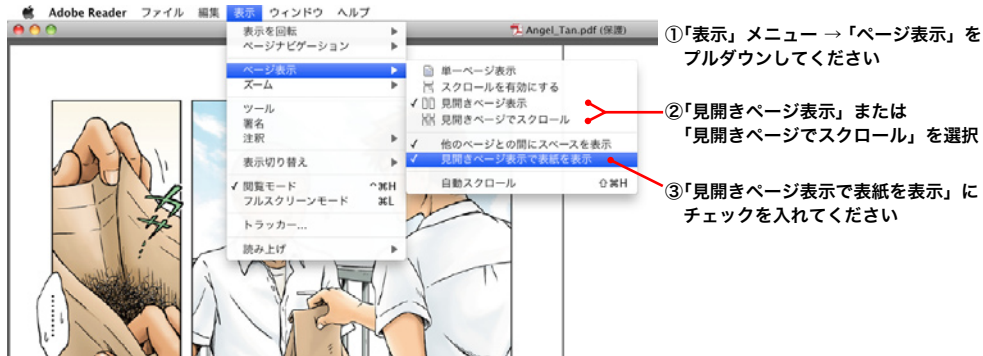
※Acrobat は何度か製品名の変更がありますが、旧製品 :Acrobat Reader (Ver.5 以降) / Adobe Reader (全 Ver.) / 最新の Acrobat Reader DC いずれでもご利用いただけます。

Acrobat Reader は下記より無料ダウンロードが可能です。

<https://get.adobe.com/jp/reader/otherversions/>

◆Acrobat の見開き表示設定について

Acrobat Reader で見開き表示する場合は次のように設定して下さい。



上記の②のかわりに、環境設定→ページ表示からページレイアウトを「見開きページ」または「連続見開きページ」を選択することもできます（デフォルト設定が見開き表示になります）

自由の天使ちゃん

第一章

「じゃあ、なんか飲み物持つてくつから先に始めてろよ」

「あ、うん。悪いね」

福来^{ふくらい}恵介^{けいすけ}が部屋を出て階下へ降りていくなり、拝田^{はいだ}礼一郎^{らいいちろう}は持参した勉強道具もそつちのけで、四つん這いになって部屋の床を物色し始めた。

「ちえつ、何だよ……オレが来るからって、わざわざ掃除しやがったのか？」

昨日、事前に「勉強を覚えてくれ」と頼んだのがいけなかったらしい。恵介の部屋は普段よりきちんと整理整頓され、掃除機をかけたらしいフローリングの床は、埃一つない状態だった。こんな事なら、いつものようにいきなり押しかければ良かったと後悔した。

「でもどんなに丁寧に掃除したって、必ずどこかに一本や二本は……」

礼一郎は部屋の中をいざって進みながら、床の隅々まで舐めるように凝視して探し続ける。ふとベッドの下

の暗がりの中にキラリと光を反射するものが目に留まった。胸の高鳴りを抑えつつ、手を伸ばして優しくそつと“それ”をつまみ上げた。

「やった、あつたぞ!!」

思わず声が出してしまった。つまんだ指先からの振動を受け、ふるふると震える“それ”。カーブした湾曲部が、時折光を反射してはキラッと光る。愛おしげにそのカーブを指先でなぞり、ボコボコとねじれた表面の感触をうっとり味わっていたその時、背後で声がした。

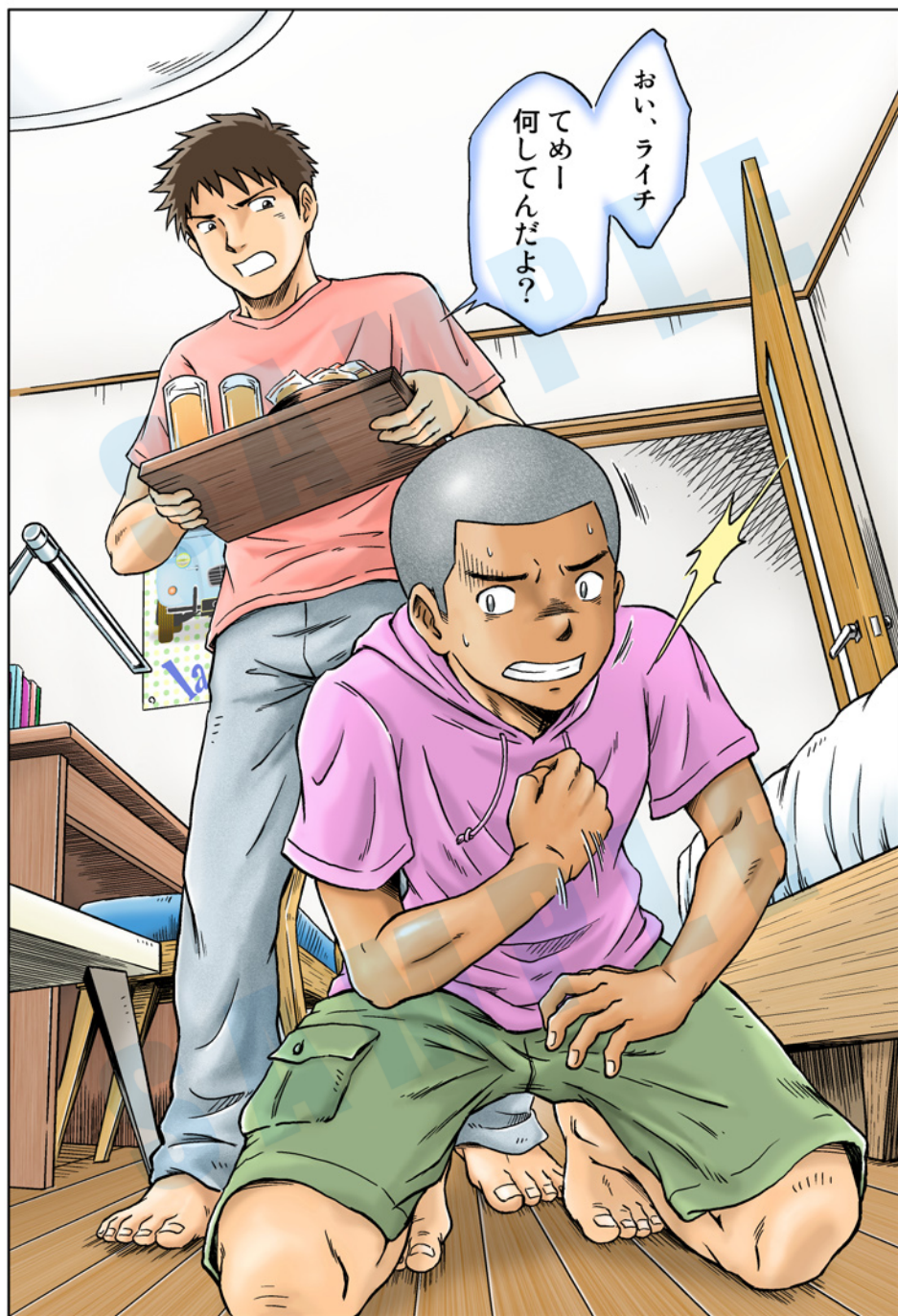
「おいライチ、てめー何してんだよ？」

振り返ると、飲み物とスナック菓子のをせたお盆を手に、恵介がこちらを見下ろしていた。

「あつ、いやそのっ……」

慌てて手にしたお宝を握りしめて後ろ手に隠すと、何とかこの場を誤魔化す良い方策は無いものかと頭を巡らせる。

「ハハ……ッ、あーいや、恵介でもエロ本とか隠してたりすんのかなーって……わ、悪かったよ、勝手にあちこち



探ったりして」

我ながらうまい言い訳を思いついたと思った礼一郎だったが、恵介の表情は固いままだった。黙ってお盆をテーブルに置くと、礼一郎の目前へ進み出で、ガシッとその肩を掴んで言った。

「……見せろ」

「えっ」

「何か手に隠しただろ、見せろよ！」険しい表情で礼一郎を睨みつける恵介。

「こ、これはゴミが落ちてたから……」

どうにか言い逃れようとする礼一郎だったが、恵介は彼の腕を掴んでねじ上げ、固く結んだ拳を開かせようとする。揉み合いとなった二人だったが、体格も腕力も恵介の方が明らかに上だ。必死の抵抗も空しく、ついにかじ開けられた礼一郎の掌から、例のモノの姿が露わになってしまった。

「は？　なんでこんなモン……」

恵介の口から驚きと戸惑いの混じった声がこぼれる。

それもそのはず、彼の視線の先、礼一郎の掌にあったのは、なんと一本の縮れた陰毛であった。



「どういふことなのか説明しろよ」

椅子にどつかと座った恵介の前で、うな垂れた礼一郎が正座させられている。例の陰毛を指先で弄びながら彼を睨んでいた恵介だったが、黙りこくったままの礼一郎に大きく溜息をつくと言った。

「なあ、怒らねえから言えよ。何か訳があるんだろ？」

その言葉に、今まで身じろぎもしなかった礼一郎はビクツと肩を震わせると、やがて絞り出すような声でぼそと口を開いた。

「明後日、部の紅白試合があつて……」

「試合つて、野球部のか？」

「うん……その結果次第で、来季のレギュラーを決めるつて、監督が」

「それとチン毛に何の関係があるんだよ？」

まどろっこしいやり取りにややイラついた恵介が語気

を強める。と、慌てて礼一郎が後を続けた。

「——お、お守りに欲しかったんだ！」

「お守り？」

意外な答えに恵介は眉間を寄せ、礼一郎を覗き込むように身を乗り出して訊き返した。

「そ、そうだよ。昔からある風習で、勝負事の時に誰かの下の毛を持つてると御利益があるんだって」

「そんな話、聞いたことねえけど」

「本当だってば!! うちの親父だって、競馬に行く時には必ず母さんのを持つて行ってるし！」

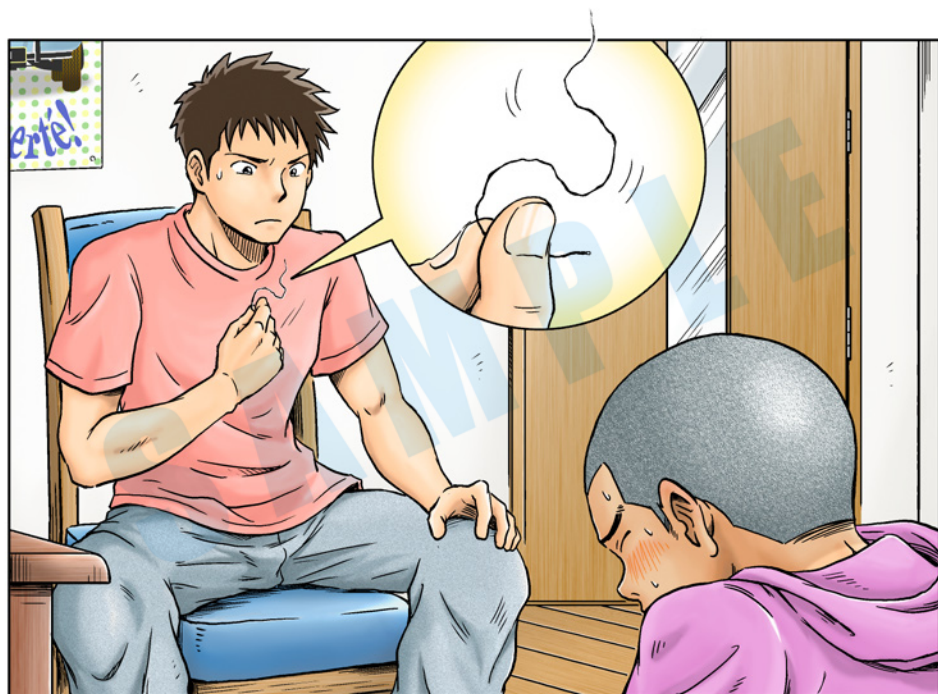
ムキになった礼一郎が食って掛かると、思わず二人の視線がかち合って見詰め合う形になった。何となく気まずい空気が流れて、互いに視線を逸らしてしまった。

「……だからって、何でオレのなんだよ？」

どこか不機嫌そうな口調で恵介が沈黙を破る。

「オレ、バスケ部だし野球経験ねーし、御利益って事なら部活の先輩にでも貰った方がいいじゃねーか」

「そ、それは恵介が……」



「オレが何だよ？」

正座した膝頭に置いた指がギュッと肉に食い込む。言葉が続けようと口を開いた礼一郎だったが、そのまましばし固まった後、はあつと大きく息を吐くと弱々しく呟いた。

「だつてお前、なんでも持つてるじゃん……」

「は？」

「そうだろ、運動も勉強も万能だし、身長高くて顔だつてイイ方だしさ。オレ、昔からお前みたいになりたかつたんだよ。だから少しでもあやかれたらつて……」

礼一郎は頬を赤らめつつ、同時に悔しさを滲ませながら言った。

予想外に褒めちぎられた恵介は、どうにも居心地が悪そうに体を揺らすと、改めて目の前の礼一郎をまじまじと見た。

家が近所な上に、親同士が職場の同僚という縁で、幼い頃から兄弟のように育った二人ではあつたが、確かに恵介に比べて礼一郎は容姿才能に恵まれているとは言え

なかった。中学での成績も恵介の方が断然上で、今二人が一緒に通っている高校も、もし恵介がインフルエンザで本命入試に失敗していなければ、別々の学校になつていたはずだ。

また、礼一郎が所属する野球部にしても強豪とは程遠いレベル。部員数も20人そこそこで、夏に三年生が抜けた今となつては、本来なら二年の礼一郎が順当にレギュラーに選ばれて然るべきなのだ。

つまり、彼がレギュラーの座を争っているのは一年生の部員達なのであった。

「別に……お前だつていい所あんだろ」

「いいよ、無理に慰めてくれなくなつたつて」

出来るだけ感情を表に出さないよう取り成したつもりだったが、長い付き合ひのお蔭で礼一郎には通用しなかったようだ。

恵介はしばらくの間じつと礼一郎を見つめていたが、やがてふうつと小さく溜息をつくと言った。

「わかつたよ、こんな物でお前が頑張れるんなら、いくらでも呉れてやるよ」

「えっ、マジでいいの!」

飛び上がった喜ぶ礼一郎の姿を、やれやれという面持ちで眺めていた恵介だったが、やがて真面目な顔に戻る、手にした陰毛を彼に示してこう言った。

「でもお前、ホントにこいつでいいのか? これが確実にオレの物だとは言いい切れねえと思うけど」

「ど、どうしてだよ?」

「だってチン毛ってとんでもない場所に移動してたりするじゃん。別名『自由の天使』っていう位でさ。こいつはウチの家族の物かも知れないし、ひょっとしたらお前自身の毛って可能性すらあるぜ?」

確かに恵介の言う通りだった。なぜこんな所に? と

いう場所から縮れ毛が現れた事は、礼一郎自身も何度も経験していた。その事実が気付かれ、すっかり言葉を無くして凹んでしまった彼を前に、恵介は持っていた陰毛をゴミ箱に放り込むと、椅子から立ち上がって仁王立ちになった。

「しゃーねえなあ、ホラ、直^{じか}に取れよ」

そう言うなり、穿いていたスウェットの紐を緩め、下着もろとも膝までずるつと下ろした。

「なっ、なっ、おまつ……!!」

のけ反るように後ろに跳び退り、目玉を剥いて驚く礼一郎。その姿を、恵介は腰に手を当て呆れたように見る。「んだよ、驚き過ぎだろ。ガキの頃は一緒に風呂入りたりしてたじゃねーか」

確かに恵介の言う通りだったが、だがそれは二人が小学生だった時分の話だ。中学に入ってから……正確には毛が生えてからは、互いの局部を見せ合った事は無い。修学旅行の風呂だって、皆の手前、隠した隙間からちらつと目にしたかどうかという程度だ。

実に五年ぶりくらいの再会、すっかり成長して見違えた恵介のシンボルを目前にして、礼一郎の身体は硬直して身動き取れなくなった。目を逸らそうとしても、黒々と生い茂った茂みの中心にずしりと鎮座する圧倒的存在感に、視線が釘付けられてしまう。

「……ちえっ、こっちまで恵まれてんのかよ」

随分と間が空いてから、そんな皮肉めいた恨み節をひ

なり出すのがやつとだった。

「どうしたよ、チン毛が欲しいんだろ？　自分で好きなだけ抜いていいぜ」

「ええっ、お、オレが抜くのかよ……!？」

しばらく逡巡していた礼一郎だったが、要るなら早くしろ！と強く恵介に促され、おずおずと彼の股間に手を伸ばした。震える指先で鼠蹊部の右脇の辺りの毛束を数本掴むと、覚悟を決めてぐいっと引く。

だが恵介の若い毛根は予想以上に強靱で、ただの一本も抜けることなく礼一郎の指をすり抜けてしまった。反動で揺すられた本尊が振り子のように揺れ、礼一郎の手にペタンと当たって跳ねた。

「ぐっ、ぐっ、ゴメンツ!!」

「痛つてえなあ、下手に加減されると余計痛てえんだよ！　男らしくガツといけ、ガツと!!」

恵介は礼一郎の手首を掴むとグイとその場所へ導き、自分の中心を鷲掴みさせた。礼一郎の手のひらに、恵介のチンポがべったりと貼りつく。茂みにうずもれた指先

からは、体温と汗で蒸れた湿気が伝わってきた。

「へへっ、今日は暑かったからな、蒸れ蒸れの臭チンだぜー」

チンポを握らせた礼一郎の手に、さらに恵介も上から手を重ねて揉み込むように様にグニグニと動かす。

「ちよっ……おま、ふざけんなって……」

礼一郎は何故か耳まで真っ赤になって狼狽する。

「バカ、何照れてんだよ！　今度はしっかり握って一気に引けよ？　……1、2の、3っ!!」

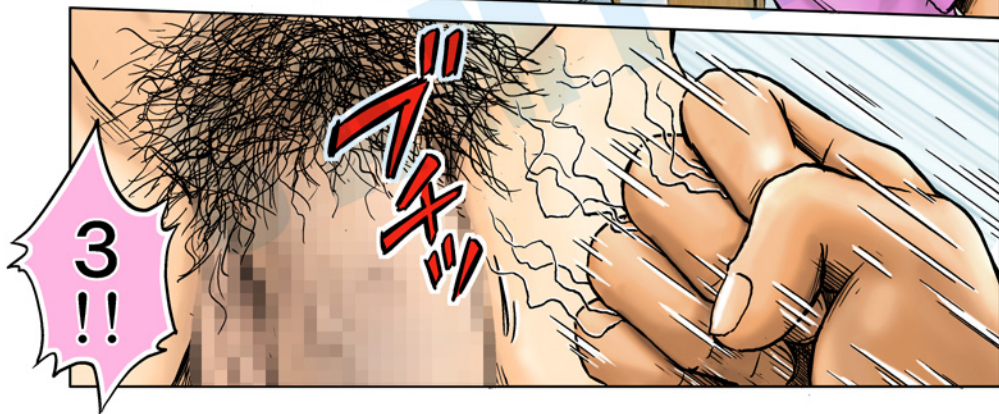
恵介の号令と共に、礼一郎は目をギュッと瞑って力いっぱい腕を引いた。プチプチツという感触があり、そつと脛を開けて拳を確かめてみると、握りしめた指の間からは7、8本程の陰毛が飛び出していた。

「おー痛ッてえ……なあおい、そのくらいの本数で足りるのか？」

恵介が顔をしかめて鼠蹊部をさすりながら、礼一郎に尋ねる。

「うん……あ、ありがと……」

念願のチン毛を手に入れたというのに、礼一郎はうわ



の空で気の無い応答をしただけで、そそくさと後ろを向いてしまった。そして縮れ毛をティッシュに包むと、いそいそと自分のバッグへとしまい込む。

「何だよ、あんなに欲しがってたくせに、もつと嬉しそうにしるよな。あ、そうそう、言っとくがタダで呉れてやる訳じゃねーからな？」

恵介の言葉に、驚いた礼一郎が振り返る。

「えっ、まさか金取るのかよ？」

「ハッ、テメーの財布の中身なんざタカが知れてんだよ。そうじゃなくて、オレの運を分けてやったんだから、ちゃんと結果出せて事だよ。試合でヒットの一本くらい打ってみせろよな？」

下ろしていたパンツとスウェットをずり上げてイチモツを収納し、ポジション調整をしながら恵介が言う。

「ウン……なるだけ頑張るよ」

今ひとつ覇気を感じられない礼一郎の態度に、恵介はフンと鼻を鳴らし、腕を組んで言った。

「んじゃ、打てなかったら謝罪と罰ゲームな？」

「——なっ!!」

「それくらい当たり前だろ。そうだな……もしヒット打てなかったら、罰としてお前坊主にしろや」

怪訝そうな顔で恵介を見上げる礼一郎。それもそのはず、礼一郎の頭は野球部員らしく、既に2、3ミリの丸刈り頭だったからだ。

「これ以上どうやって坊主にしろって言うんだよ」礼一郎が呆れた口調でぼやく。

すると恵介はニヤニヤと薄笑いを浮かべながらこう告げた。

「誰が頭丸めろつつたよ。チン毛の対価なんだから、坊主にするのはチンポの毛に決まってるじゃん！」

あつけに取られてばかんと口を開けたまま、恵介を見上げる礼一郎。

「嫌ならチン毛返せよ。何だよ、打つ自信ねえのか？」

そんな弱気だから一年にまでナメられて、レギュラーも取れねえんじゃねーの？」

嘲るような恵介の挑発に、さすがの礼一郎も力つとなつて言い返す。



「わかったよ！ ヒット打てばいいんだろっ、絶対でかいの打ってやるから覚えてろ!!」
「よし、約束な！ 後になってグジグジ言っくんじゃねーぞ？」

面白そうにへらへら笑う恵介の前に、まんまと乗せられて大言を吐いてしまった礼一郎は、不安と後悔の入り混じった心持ちで俯くしかなかった。

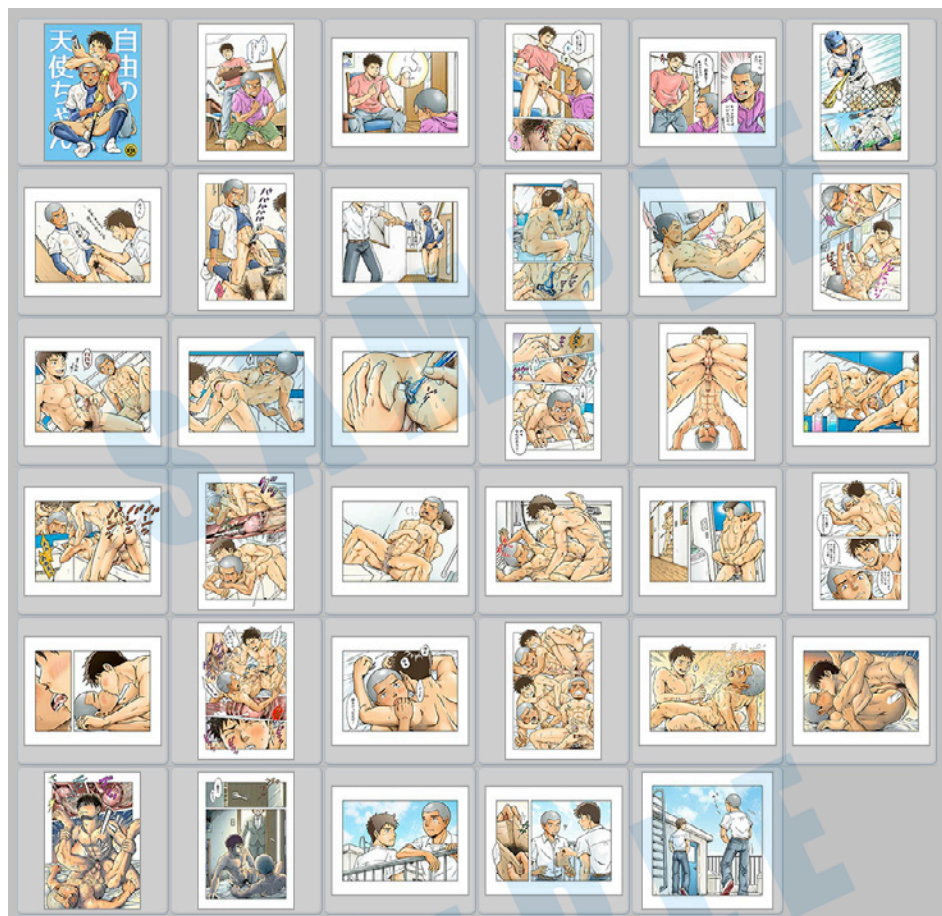
(サンプルはここまでです)



▲野球部君の日焼け跡あり版と、

▼日焼け跡無し版の2バージョンを収録





▲フルカラー挿絵 34 点＋表紙。挿絵無しの文字のみバージョンもあります。おまけとして挿絵の JPEG 画像も収録。

■収録内容

- ・挿絵あり版……総頁 74 ページ [本文 69 ページ]
(※日焼け有無の 2 バージョン)
- ・文字のみ版……総頁 50 ページ [本文 45 ページ]
- ・JPEG 画像……挿絵のみの画像 (※日焼け有無両方)

Produced by

ENG

<http://eng.dojin.com/>